

心を寄たり、當家の存亡計るべからず、一日の過も残多し、只理を非にまげて、唯今まで疎遠の諸大將達へもへりくだり、遺恨なく計ひて、交り親しみまばらく時を待べきも、一つの計策にてこそといひければ、三成されば縦令一時に能志を遂るとも、後の安かるべき様を計るなりといひけるに、左近いや、事能く一時に勝を得るならば、後に何の危き事か候べき、内府に親しき人々を積るに、其兵二万に過べからず、味方素より心を合する大國の人は、又近國の兵を集るとも、忽馳寄て、五六万には及ぶべし、景勝卿再拜を取て下知し、關東を攻破らんに、何程の事か候べきとて、又存る旨をいひ出しけるに、客の來て三成座を立ければ、檜原彦右衛門居残りて、左近に向かひ、いかにも仰さる事也、松永彈正、明智光秀は、無双の惡逆者なれど、事を決斷するに、誰か相並ぶべき、此詮議の破り、相手に頼むべきものをといひけるとかや、其によりてかく柳生には答へけるとなり。

〔勇士物語〕大坂にて、三浦與右衛門は、弓大將なりける、味方敗軍の時、不知して、味方を射させける故、味方備たて返す、まかれども、とかくいふもののおほかりける、味方百人射させ、一万の備がためさせけるは、大なる功なりとて、御感狀下さる。

〔武野燭談十六〕直孝忠勝信綱重宗慎勤之事

奥州○伊達

笑ひ顔にて、されば候、大神君百万石可給との御制詞、今に事切申さる故、此儀を申

たる事、餘儀もあらずと申たり、掃部頭○井伊

是を聞て、御誓約と宣ふ御眞翰、御所持にやと語り

ければ、中々慥成御神盟の一紙こそ候へ、御目に可懸とて取出す、掃部頭手水嗽し、是を拜見し、可違もなき御直判にて、是ほどの證據ゆめくうけたまはらず、但此御神文、掃部頭にたまわるべし、申請つとて押戴寸々に引裂給ひけり、昔は百万石はさて置、貳百万石も參らせ度こそ、東照宮思召けめ、只今御覽せば、何國にて加恩の地候哉なまじいに、此書付、貴宅に取傳られて、上江も御